

深い軒に制御される
自然の光と景色

井上邸
(福岡県糸島郡)



階段を下りると、目の前に海が広がる。直射日光ではなく、深い軒にパウンドして室内に入ってくる光が、落ち着きをもたらしている。

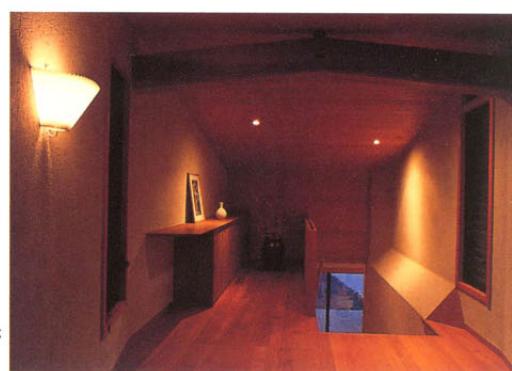


軒とデッキは微妙にアールを描く。ヘーベシーべは正面の戸袋に引き込まれる仕組み。



階段の見上げ。段板には、厚さ45ミリのタモ材を使っている。柿沼さんが設計した階段は、非常に上り下りしやすいと、以前の家から好評だったとのこと。

こぢんまりとした暗い玄関を入ると、階段が明るい海へと誘ってくれる。天井には、ダウンライトがランダムに取り付けられている。



中塗り用の砂漆喰が光をほどよく吸収する。椅子は、1960年代、流政之氏の監修のもと、讃岐民具連の活動の一環として桜製作所が製作した「ミングレンチェア」。白井景一氏もこの椅子を好んでいたという。

薄墨色の砂漆喰が
空間をおだやかに染め上げる。



あえて切り取ることにより、
鮮やかに見えてくるもの。

ダイニングの横長の窓は、台所仕事をしながら景色が眺められるよう、右手を斜めにカットしている。母屋と登り梁はビーラー、化粧野地板はホワイトアッシュ。





右手のドアの向こうが寝室。左手奥に浴室、トイレがある。空気はゆるやかにつながっているが、空間の重心ははっきりしている。

室内における「適度な明るさ」とは、一体どの程度なのだろうか。柿沼守利さんは「一般の常識よりもかなりセーブされた明るさではないか」という。その点から見ると現代人が好む明るさの価値観は捉え難く、影の所在を見失つていると案ずるほどだそうだ。

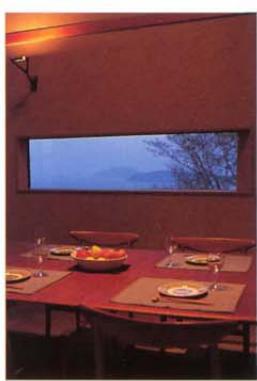
「そう明るくない、ほの暗い、静かな空間。精神を集中させ、思考するための場にとつての適度な明るさがあるはず」と氏は問いかける。柿沼さんの建築において光は、むしろ遮られることによってその存在を感じさせる。曰く、「寺院建築や教会建築がそうであるように、光は祈りのためのひとつの道具立てとして非日常空間をつくる作用がある」ことを、現代はついぞ見逃しているのかもしれない。

福岡にある、柿沼さんの手がけたふたつの建築を訪ねた。海沿いの週末の家と都市の住まい。ひとつは存分に取れる開口部をむしろ閉じることで地の利を生かそうとし、もうひとつは限られた住空間にできるだけ自然の息吹を取り入れようと知恵を絞る。光の抑制がもたらす居心地に目を向けてみたいと思う。

鉄筋コンクリート造に木造を載せた家は、山の急斜面に沿つて建てられており。周囲の別荘群が海の眺望を空の開放をめいっぱい室内に取り込もうと上へと建つのに対し、井上邸は山肌に沿つて階を下ろし、その存在をできるだけ消そうとしているかのようだ。夏には周囲の木々の茂りでさらに目立たなくなるよう外装は深緑色に塗られており。

道路に面した玄関口は拍子抜けしそうなほど小さい。「小屋でも建てたのかしら」と近所は噂したそうだが、駐

竣工は2002年、柿沼さんへは2度目の依頼となつた。1軒目は、17年前に建てた福岡市内の自邸。その住み心地のよさから糸島の家も「柿沼さん以外には考えられなかつた」と井上さんは話す。



フィックスの窓はまさに絵のよう。開口部は位置と形によって、小さいことがむしろ効果的になる。

車場のほど中にある、間口半間奥行き一間半余の濃い緑色をした木造の箱に迎えられた。ドアを開ける、こぢんまりと落ち着いた玄関ホールから階段が真つ直ぐ階下へ降りる。照明を絞った長い階段室は、地中へ入るような感覚を誘う。

そしていよいよ、居間へと下り立つ少し手前で真っ青な海が足下に広がった。ようこそ、そんな声がどこからか聞こえてきそうな瞬間だ。海拔180メートルから眺める絶景は、影から光へのドラマティックな演出によつて室内へ招き入れられ、それはまさに、『陰翳礼讃』を目指とする柿沼流の好みが伺えるものだった。

こうした陰影の妙は柿沼建築の真骨頂ともいえる技で、深い軒、より絞つた開口部、白壁を避け、南を閉じ、北を開けるなど、糸島の家でもその手法を随所で取り入れている。居間の床にスレートを敷き、階段や天井など各所に多用するチークやタモなどの木材に加え、壁の砂漆喰が外光に更なる落ちきと品格を与えている。

しかし、「思つたより明るすぎました」。施主もそこが唯一の不満だと笑う。というのも、階段室にもあえて明かり取りを設けないほどの自宅の暗さに慣れている分、糸島の家は明るいと

デッキ側から寝室を見る。左奥が入口。ヘッドボード奥の棚によつて、ベッドがゆるやかに仕切られ、睡眠の場に落ち着いた雰囲気が生まれている。

感じるのである。「海面をレフにして入ってくる光は思いのほか明るかった」と述懐する柿沼さんは、今後漆喰の色をもうひとつアンダーにして修正を図りたいと話す。

さらに今回は、この陰影に一服の視覚効果が図られていた。居間から外へ張り出したウッドデッキと、その上に覆いかぶさるように掛かる軒が中央で膨らむアールを描き、居間からの眺めを映画のスクリーンのようにパノラマ状に切り取っている。

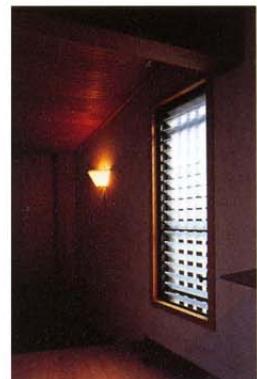
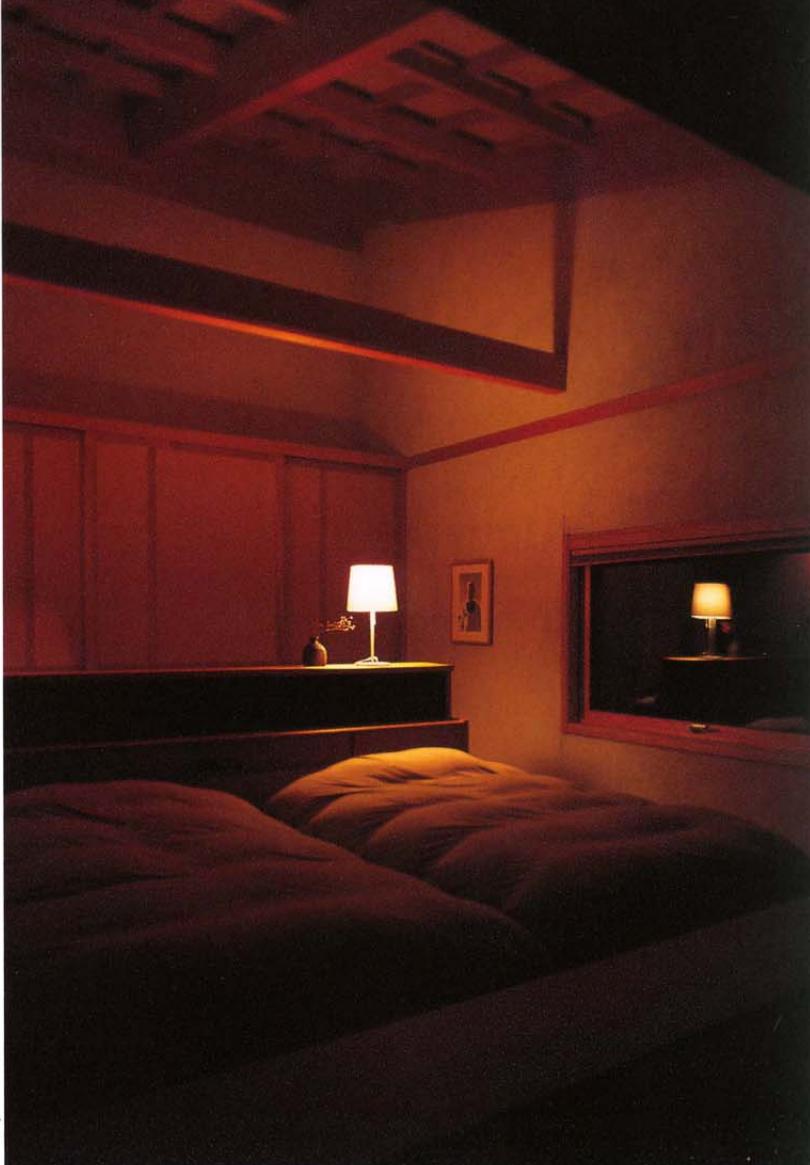
「いやいや、狙つたわけではないです。真っ直ぐだと味気ないので自然にラウンドさせた、それが中から見るとああいう結果になつたんです」

自身の作風について多くを語らない氏だが、どれだけ光を入れ、あるいは入れないか、開口部に周到な注意を払つているのは、これまでの仕事からも明らかだ。

「居心地のいい空間とは本質的には閉じているものではないでしょうか。精神の安寧には、ほどよく暗い方がいい。本来日本の文化は暗がりを前提に洗練されていったはずですから」



予約制で開放する、井上孝治写真館。同氏は、福岡を中心に戦前から人と町を撮り続けた。そのやさしい眼差しに思わず引きこまれる、そんな写真だ。

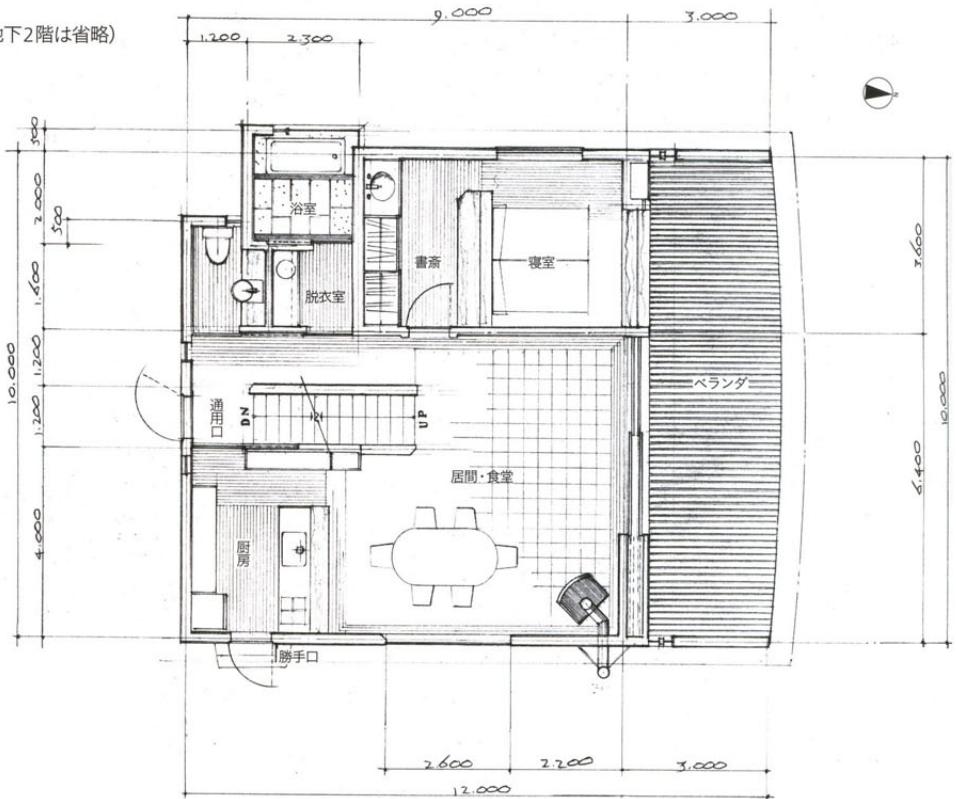


玄関土間は平面で見ると台形になっている。この空間の開口部はこのルーバーだけだが十分な明るさ。

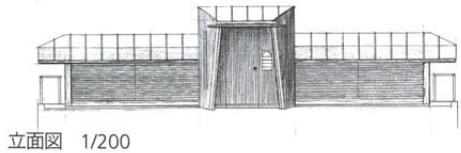


トイレ。ルーバー部分には障子をはめこむ予定のこと。

地下1階平面図 1/150 (1、地下2階は省略)

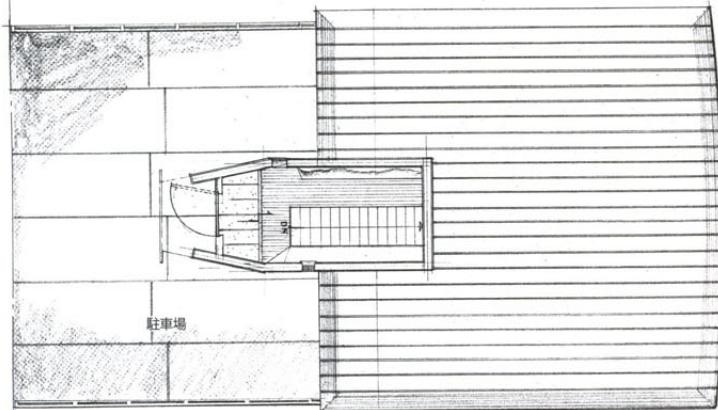


道路側、少し高い位置から見たところ。玄関の両脇は駐車スペースとなる。

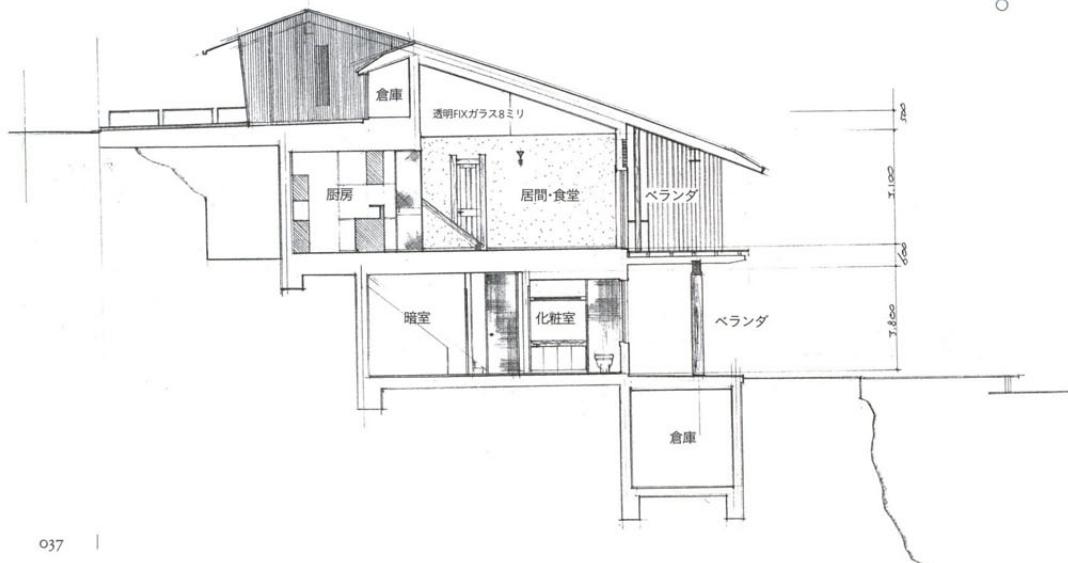


立面図 1/200

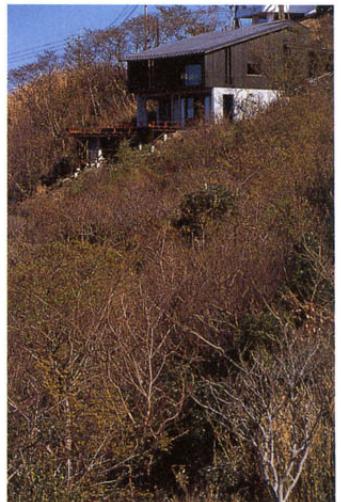
屋根伏図 1/200



断面図 1/200



地形に沿うように、光や風をそつと受け止めるように。



地形となじむように、斜面に沿って開かれる。
地下2階にもベランダがしつらえられた。

DATA

井上邸

所在地/福岡県糸島郡

設計/柿沼守利

施工/鶴留元・直営

竣工/2003年3月

構造/RC造+木造 3階建（1階+地下2階）

敷地面積/1211.09m²

建築面積/66.5m²

延床面積/162.66m²

家族構成/夫婦

主な外部仕上げ/足場板張り（スギ・キシラデコール塗装）

主な内部仕上げ/クリビングダイニング>

床：スレート+チーク（温水床暖房）、
壁：砂漆喰、天井：ホワイトッシュ化粧
野地板張り

柿沼守利の
KAKINUMA, Schi
光の設計

小さな中庭をこしらえて、
必要なだけの明るさを得る

五島邸
(福岡県福岡市)



落ち着いたリビングダイニング。中庭への開口部もすべてオープンにせず、ルーバー状にホワイトアッシュを斜めに振って立て、光を制御している。タモのテーブルは柿沼さんのデザイン。床はカリン。





上/玄関方向を見る。左の小窓の向こうはキッチン。戸は引き分けられて、カウンターが配膳台となる。下/障子は敷居を設けず、フラットである。触れ止めに細かな処理を行なっている（p.42詳細図参照）。

障子や格子で光や視線をやわらかく遮る。

画家や彫刻家は北側にアトリエを設ける、と言われる。眩しい日光を遮る必要がなく、昼間の一定した光は空間に安定をもたらすからだそうだ。とすれば一般的に言われる日当たりの悪さは、落ち着きのある住まいづくりの好条件となる。

こうした立地が有効的に生かされたのが、福岡市内で和菓子屋を営む五島家の住宅兼店舗の建築だ。北東角地、建坪35坪。1階は店舗と工場、2階は夫妻の住居スペース、3階はお嬢さんの部屋（現在は主人の趣味のオーディオルームに改築）。といった間取りからは、夫妻のシンプルな暮らしぶりが垣間見える。店の正面でもある東側は閉じ、北側に面するリビングに大きな開口部をついた。と言つてもファックスで、開閉するのは上部だけ。幅一間の、床から立ち上がる一枚ガラスに障子を重ねている。サッシを区切る線が影をつくらない分、和紙を通過する光はすつきりと美しい。

リビングの東側に目を移すと、ガラス越しにうつそと緑が茂る。3坪ほどの三角形の中庭だが、深さ50センチに土を入れ、土中微生物も棲めそうな、本格的なガーデンだ。庭を軸に、居間、夫妻の寝室、浴室が配置され、どの部屋からも緑は目に入る。リビングのドアを開けると路地が敷かれ、離れのよ





中庭の向こうが、浴室とトイレ、寝室。当初はガラスの屋根をつける計画もあったというが、完全な外部にしてよかったという。

うな趣で寝室とバスルームへと繋がっている。屋根も開いもなく、雨が降れば当然濡れることになるのだが、「それがいいんですよ」、ご主人の也寿生さんは満足そうに話す。

「こんな狭い場所ですから中庭ができるなんて想像もしていなかつたです。図面で見ている時はもうひとつ部屋がつくれるのによくぶん迷ったのですが、でもこれで正解でした。風通しもいいですね」

平坦になりがちなビルの2階の住まいが、中庭をつくることで風の道ができ、採光にも変化が生まれた。

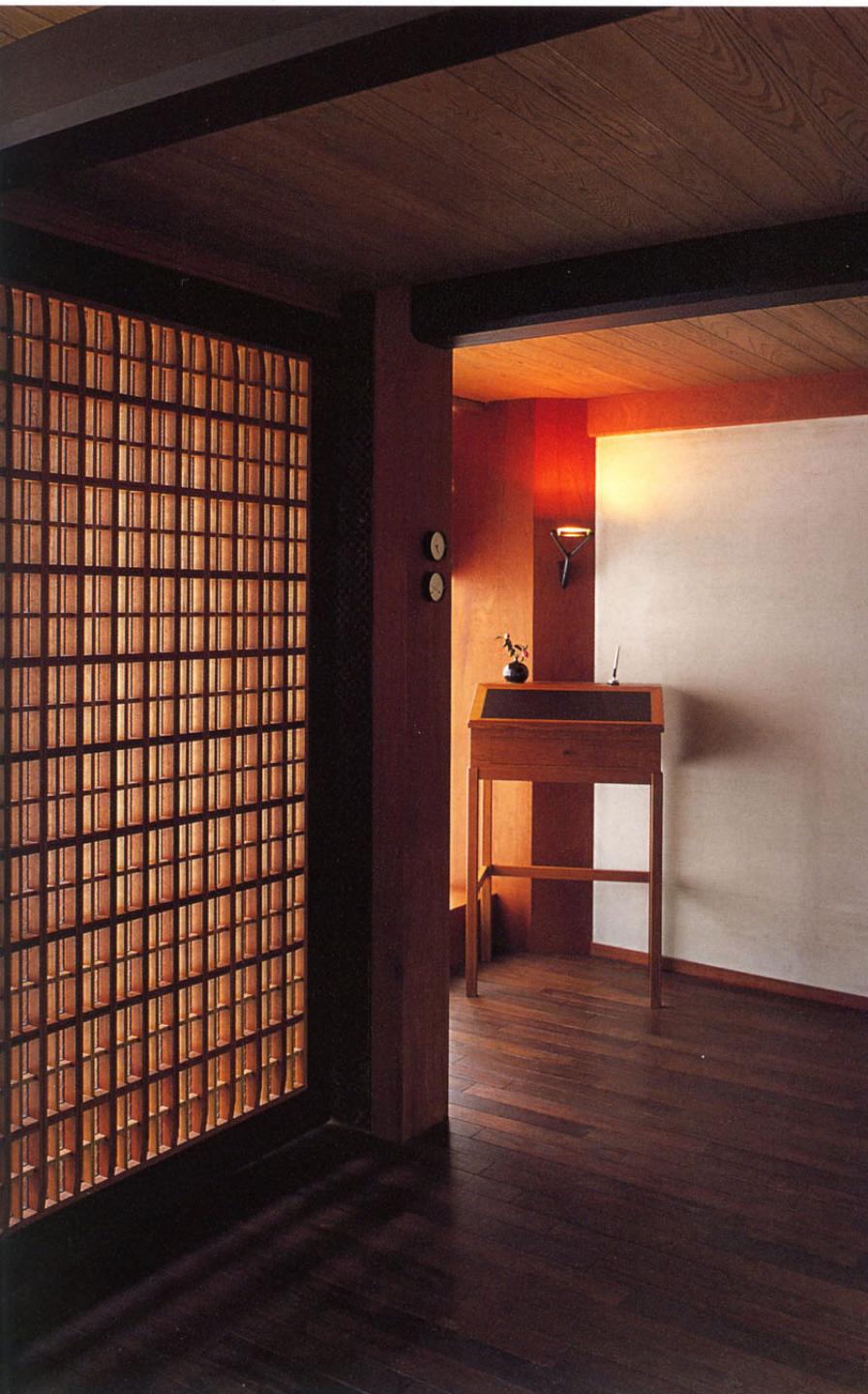
「朝は木漏れ日で目が覚めます。こんな小さな庭にも小鳥がやつてくるんですね、夜は星を見たり、月を眺めたり、とても優雅な気持ちになります」(夫人)

東側の中庭を通して入る日射し以外、直射日光は入らない。真夏にじりじりと照りつける熱射と無縁の住まい環境は都市においてはむしろ快適で、経済的にも理に適っている。しかし、その快適さは、開口調節ができるルーバー窓を随所に設けるなど、通気性を気遣



1階の和菓子店のフィッ
クス窓。ベイスギの横繁
の障子を嵌め込んでいる。

静かな光のもとでそっと息づく無垢の素材。



上/住居部分に通じる階段室。空気がこもりやすいこの場所には、スリット状の開口を設けた。コンクリートには、風合いを生かしつつ色をつける、黒いエボキシ塗装がかけられている。左/1階の店舗。入口は、中心吊りでくるりとまわる1枚扉。チークとカリンの格子が美しい。